

賀 茂 祭 詳 解

其一、葵草、葵桂鬘、及び葵・桂考

山 本 和 子

はじめに

私共大阪樟蔭女子大学の国文科では、毎年二年生に葵祭を見学させるというのが恒例であり、京都に近い者のみがもちうる特権だと喜びに思っています。ところで毎年その頃になると、学生は各自葵祭に就いて調べ始め、私も付き合せて助言をするが、その時々、いつも、賀茂祭についてまとめた適切な入門書又は解説書があったらよいと思ってきました。今年も、もう賀茂祭を過ぎたけれど、やはり同じ思いをしたので、気に入るようなものを書けるまでなどといっては来年のためにはおろかいつの事になるやらわからない故、不足分はまたこれ以後も書きかえたり、別紙にゆづるなりして、ここには、一まず今の段階で得た知識を以て、自分なりに一文を書こう。出来るだけ、専門的かつユニークなテーマを追求した総合的な解説書であり、かつあまり固苦しくなくよめる葵祭へのいざないの書でもありたいという動機と目標を以て、浅学を承知の上で、このテーマを邁らふ事にした。先達の方々、よろしく御叱正、御助言のほどお願い申し上げます。また、この文をかくに当って、下鴨神社の方々、とくに禰宜小川吉一、竹田義 詮、荒木直人氏又、京都御所の平井三良、山田重和、大八木の各氏及び心快く御著書をおかし下さった江馬務先生等にさすかった御親切、御高恩に、深く心より御礼申し上げます。

賀茂祭というと、鸚鵡返しに、葵祭という言葉が浮び、何故それを葵祭というのかというというまでもなく、賀茂祭の祭儀に参列参加する者すべてが、葵を身につける故にその名があるのだと。そこ迄は誰でも知っている。

だが、それ以上に、では葵とはどんなものか、その形状や性質、賀茂祭に使う葵と、一般に今我々の知る西洋葵、たち葵というものとどんな風がちがうのか、(一)どんな所に採れ、どんな風に賀茂祭りに用いられるのか、何本ぐらい、今何処の地で採取されるのか、(二)昔から葵が使われてきているが、それは何のためだったのだろう、(三)賀茂下上社と葵の関係、(四)「葵かつら」という表現が文学作品に繰返し出るが、葵かつらというのは一体、葵と桂なのか葵鬘なのか、二つか一つか、或は、(五)何時頃から、如何なる理由あって、葵と桂がペアで使用されるようになったのだろうか。

文学作品を仔細に検討し直すと、今と言う西洋種の「たち葵」と、この賀茂祭の祭祀に用いられる「賀茂葵」とが混在して和歌の題材として詠まれてるし、また昔の葵の事を説明している文献にも、

読者の賀茂葵に就いての概念を混迷させるような文の載っているのをも見る。かく言う私自身も、一度も賀茂葵をみたことのなかった学生時代に植物事典を読んだり、源氏物語事典を読んでも一こうに理解出来ず、源氏物語事典に出ている「葵」の説明では、「河海抄」の引用文から蜀葵からあふひについての知識は少しく得たものの、肝心の賀茂葵に就いては何も得る所がなくて、投げ出した記憶が不思議と頭に残っている。百聞は一見にしかずで、見ればほんとは何でもなく、忽ち氷解する葵草一つであっても、実際実物を見たこともない多くの人にとっては、書物によって説明を得る以外に方法がないのであるが、さて葵草に就いて書かれた文献をというわけで捜してみると、不思議な程に見当らない。

ところが私は、実際賀茂葵の解説をと試みて調べだすにつれ、たった一片の葵が賀茂葵にもつ重みをひしひしと感じ始めているのである。いや賀茂葵だけではない、今、逐一その例を掲げて論ずるいとまはないが、枕草子はいうに及ばず、源氏物語、古今、古今和歌六帖、後撰、千載、新古今、夫木、貫之集等々、葵祭やそれにちなむ葵に直接間接に材を得た物語、歌、説話は実に数多いが、それらの作品を理解し鑑賞してゆくためにも、葵草に就いて知ることには大きい意味がある。そんなわけで、私はまず「賀茂葵」の話から賀茂葵の解説を始めることにしたい。

「賀茂葵」、単に「葵」とのみ呼ばれているため、園芸用西洋種の「たち葵」と混同されるが、それでは困る。以後、まず本文では、賀茂葵に関する葵草を多くの呼名の中で最もわかり易い「賀茂葵」と統一したよび方をするにしよう。

賀茂葵に使われる故「賀茂葵」と名のつく葵草は、第一に地上を這って伸びるツタ科の一種であり、日本個有の蔓草である。第二に賀茂下上社げまげじやうのやしろの神のより代であり、賀茂下上両社共通の神紋でもある。我、国太古より、個有の蔓草であった故に我国の長い歴史の開始と共に歩んでき、伊勢神宮に准ずる神格をもった山城国第一の式内神、王城京都の守護神という賀茂両社の神紋に用いられたのであったろうし、後述するように、その葵の性質からも、賀茂両社に受け継がれている神事の太古性に思い到らず神紋として、実に相応しいと思われるのである。賀茂葵は、次のような種々の文献をみるに、実に多くの別名をもって呼ばれていたことがわかる。

和訓栞阿羅漢

あふひ、葵をいふ○中略賀茂葵に用いらるゝあふひは訓義同じく物異れり、二葉草とも両葉草ともいへり

和漢三才図会九十四本 葵 菟山州賀茂山中有二葉葵毛呂波、公佐、下略兼載雑談 賀茂祭に出る葵は二葉也、そばの葉に似たり、又、

世上に多き花の紅にさく葵も用ゆるなり、葵草照る日は神の心かかげます方に先むかふらん此歌にてみれば二葉の葵にかぎらざるなり。この歌は葵花向陽の心なり

藻塩草八草 葵

あふひ草、又たあふひとばかりも云 葵はなきくもろかづら、もろは草、二葉草神山によめり

かざし草かざしの草とも ひかげ草是も別名とあるき物にありすこし不審物 あふひは かも神山また松尾山にもみあれひくけふに葵下略

・鷲峯文集百十二 賀茂葵頌 賀茂之山 葵草之生 兩葉相對 中有二

一英 象 二月星一略 其末自采 兩葉之對 擬

陽陰精下略

・夫木集 日かけ山けふのかさしの諸葉草かけて頼むと神は知るらん 右近中将忠基卿 そのかみの御蔭の山のものは草けふは御生のしるしにぞとる 中原師光朝臣

即ち二葉草ふたばくさ 兩葉草もうほくさ かざし草かざしの草 ひかけ草

賀茂葵 二葉葵 また単に あふひとも。

かく、八通りもの呼名をもつ賀茂葵の形状は、「和漢三才図絵」などには、「其葉団而微尖、面青背帶紫色」即ちその葉形は円くて先がちよつと尖り、葉の表は青く裏は幾分紫色を帯ぶとのみ説明し、「兼載雑談」にも上記の例文中に見ることく「賀茂祭に出る葵は二葉也、そばの葉に似たり」など書いているが、これではどうにもならない。殊に後者の蕎の葉に似ているなどの説明がある文に続いて「又世上に多き花の紅にさく葵も用ゆるなり、葵草照る日は神の心かもかけさす方に先むかふらん 此歌にてみれば二葉の葵にかぎらざるなり」というに至っては、賀茂祭には、賀茂葵の外に西洋葵も用いられた事があるような書きぶりだが、賀茂神社がその祭祀に本筋として外来の朝顔のような大輪の紅紫色の花が咲くフユアオイ、タチアオイ、ゼニアオイなど用いると考えるだけでもおかしさがこみあげてくるが、私だけなのだろうか。

葵の全体的な生えている状態を印象的に一言で云えば、我々のよく知っているサツマイモの茂っている状態を思い出し出したとばかりい。先記の「三才図絵」も「兼載雑談」もこの一見した形状をとばして、葉の形や色だけ、物事の末葉だけを、「其葉団」とか「そば

の葉に似たり」などと取り立てて言い、凡そ、そのイメージが実物とはほど遠いから具合が悪い。団扇といつても昨今は色んな形がありますし、蕎に似るといっても、第一、賀茂葵は蕎のように地面からすつくと立ち上って生えてなどいず、地面を匍匐している蔓草なんだし、それに葉の色はもつと濃く葉の形は蕎などよりよりハート形で葉も6-10 ㎝とともつと大きい。又、現代の説明、例えば「原色植物大図鑑」(村越三男著 牧野聖太郎補)によつても「ふたば葵 かもあおい 冬季は草が枯れる。花期3-5月、本州(福島県より西)、四国、九州の山地、日陰に生じ日本の特性、葉は対生、以平略とあって、傍点部分は前記の二書よりよほど詳しいが、それでもその説明によると、本州や四国や九州の山地の日陰の場所でさえあればどこにでも手軽に見付け得るような書き振りであるが、どっこい、なかなか そんな何処にでも見い出せるような、平凡な生易しい蔓草なんぞではない。ということが 次のようなお話からおわかりいたゞけるでしょう。

下鴨神社の禰宜でいらつしやり、かつ、この賀茂葵を二十年來御自分でも自宅で五十鉢七十鉢と栽培しておられ、御自身も若い頃から葵草群生の地を探索しに行かれた経験もお持ちの、いわば、葵草研究の大家でもいらつしやる小川吉一氏に、私は「葵の群生している景を見たから、もし御迷惑でなかったら、賀茂祭に御使用になる葵草を採取している 雲ヶ畑のどなたか を御紹介していたゞけませんか」と厚かましくも気軽にお願いしてみたのだ。雲ヶ畑ここが現在の賀茂祭に用いられる葵を採集している

場所だ。但、下鴨一社の採集地である。現在、御所は御所で、上賀茂は、上賀茂でと各自三者独立して、葵祭の祭儀に供するに、なんと驚くなかれ、上賀茂は七千本、下鴨も大体それと同じくらいの本数というから大変な量を採集しているわけで、その採集の苦労も後述することく、並大抵のものではないのであるが、とにかく、採集方法は上賀茂は貴布祿で、下鴨は雲ヶ畑、御所も貴布祿ではあるが別途に採集されている現状である。

「和漢三才図絵」には、先程あげた文に続いて賀茂祭に簡単に言及した後で「猷葵於北山中村」とあり、「歌林四季物語」に、「あふひをかくるは賀茂山静原しづはより奉れること御夢の告也」と言及していたことから、この事を確かめるため小川氏より以前に、やはり下鴨の禰宜でいらしやる竹田義詮氏にお会いして、現在の採地は何処なのかお教え願った。その折、下鴨神社の社務所の中庭でちよびり土の上を這っている賀茂葵とまだひこ生えの鉢植えの賀茂葵とを見せていたゞきながら、以前は静原で採られていたが、なくなつたので現在は雲ヶ畑で採っているとお教えいたゞき、洛北、雲ヶ畑が現在の採集地であることを私は知っていたのだ。小川氏は、言下に

「そりゃあ、よされた方がよいですよ。行けませんわ。ちょっとやそつとで行けるような処に生えているんじゃないんですよ。それこそ、山合の谷川の川中を、長靴をはいて這いながら登ってゆく、石垣をぼとぼとなつてよじ登り、生え茂つた草にすぶ濡れになり、滝に打たれ、もう大へんなんだ、今年も子供をつれて一緒に出かけたけれど、五分の一と行かないところで音をあげてしまい、ついて行

けませんでした。どうしても行きたいと思うなら、防寒具、レインコート、長靴、懐中電燈を必ず用意して行かないと駄目ですよ。」と言われたのであった。以下、忙しい御時間をさいて根掘り葉掘りきく私に対し、嫌がりもなさらずお話し下さつた小川禰宜に感謝しつつ、その話をまとめてみるところである。貴布祿にも行つたけれど、やはり静かな谷合いの川で湿度が年中あつて、日の射さない場所というのが生育地の根本条件で、その上に葵に適した温度や養分のある所、にしか生えない。三百米から五百米位、よじ登らねばならぬような湿度の十分ある山合いで、しかも、その谷で生えている処が一ヶ所か二箇所しかなく、それも移動性で、長年月同じ場所にあるのではなく、少しづつ生え茂る場所が違つて来ていることを、始めて知つたと言われる。特に私にとって、示唆に富んでいた賀茂葵の特性は次の二点であつた。その一つは、唐葵からあおいⅡ立葵のもつ向陽性に対して、全く対照的に極端に陽の光を嫌うという著しい特性をもっていることであつた。小川禰宜のお若い時分、採取の為に山に分け入つた時も外は明るいのに、その山中の辺は、あたり一面高い杉や松の木立の為に真つ暗で、その下で一人て居るのが恐ろしくなるような場所だ、採るや否や逃げ帰つたという御記憶もある。高い木の間からちら／＼入るくらいの日光だといふのだが、鉢植えでも出来るが日に当たると葉が赤っぽく紫味を帯び固く厚くなつてきて採集地でみる緑がきつ／＼、文字通り「緑したゝる」というような色合いか、手に触れたら溶けるような、いかにも弱いような感触とか、なくなつて了うし、芽の出ているものでも、直射日光に当たる

と、カチツと固まって駄目になってしまふ。だから葵祭りの当日でも、ものゝ数十分と行列を列ねるまでもう駄目になってしまふ。

鉢植えの葵は日に当てなければ十月頃迄葉はあり、当てるは八月頃には枯れてしまふと言ふこと。その第二には、これまた日光を嫌うと同じ程極端に、驚くほど清浄な土地を好むという一この事は上賀茂社、下鴨社の神職の方が異口同音に一致して御指摘なされた一習性のあることだ。例えば鉢植えの肥料でも、いい加減なもの、汚れたもの、きつい動物性の糞のようなものをやると一遍に枯れてしまふし、驚くなかれ、汚れた空気はもとより、唾がかかると一遍に駄目になってしまふと云ふ。

私は、その言葉に続いて、「葵の花のさくころ」と題する、葉室直躬氏が葵祭のパンフレットのために今から七、八年前にお書きになった二十行余りの美しい短文を紹介させていたと云ふ。葵祭りの骨格を端的にあらわし得ていると感服させられるこの文の中で葵草の清浄を好む習性に就いて氏もまたかく語られている。

「五月にはいると、葵の二葉の間からつぼみがではじめる。

そのころから下鴨神社では葵祭のさきがけ、前儀がはじまる。まづ、五月三日に葵祭の当日に天災人災のないように古式の鳴弦轟目神事めいげんきんめしんじが行われ、つゞいて五日に御所から神社までの沿道のみけがれ、魔よけの神事、武射神事ぶしやしんじ。立夏の日に葵祭に先きだつてご本殿のご調度を夏物にとりかえ、ご神宝類があらためられる儀式。続いて、齋王以下命婦、女孺、女童、女別当、むまのり女等齋王列に参加する三十数名のみそぎの儀が行れ、十二日の日本最古の神幸列、みかけ祭が行はれるころには葵祭も最高潮

にたつし、葵の花のつぼみもすっかりひらき、深江の小さな、かわいい花をみる事ができる。

現在、この葵は洛北の奥ふかい、人のわけいらぬところから採取しています。そこは、谷川のせせらぎがあり、昼を暗いといつた年中陽のささない、じめじめしたところ、しかも、人やけだものとおらないところに群生しています。だから一名日蔭草とも云はれています。当日はこの葵の葉と桂の葉をかんざしにして供奉者は冠にさし、社殿にはかけがらと云つて、ちようどしめなわのように飾る。社記には白鳳の頃より葵を社紋と定めた、とあります。葵祭がはじめられたのは欽明天皇のころですから、もう千数百年もの長い間、祭に優雅をそえてきたのです。下略」

傍点を私に打った所にみるように、昼なお暗く湿つた、人やけだもの通らないところにのみ群生し、それ故、日蔭草（日影草ではない）とよばれもしているのだ。葵草は、その神経質なこと、例えば唾がかると枯れてしまふという。空気の非常に清らかなところにのみ群生するのだ。私は思う、太古の昔、我々の祖先が行つた神儀は、こういった極端なほど清浄を好む葵がみずみずしく群生し、そのそばには杉や桧や桂が天に向つて層々と林立する静かで人や獣による汚れない、まことに心鎮み六根清浄となる浄らかな場所をえらんで行われていたのだと云ふことを。葉室氏の文からは群生といつてもどれほどの範囲でか不明だが、小川禰宜によると、群生といつても、現在はほんとに畳二三畳敷きくらい範囲での拡がり群生しているだけで、光には弱いが寒さには非常に強く、土がかんからかに凍っている時でも冷害でやられることはない。秋になると

来年伸びる芽が地上に二、三種位残っているだけで、その他は葉も軸も共に枯れてしまふ。茂った時の蔓の長さは、大体一尺から長いので二尺前後くらいは長さしかなかく、折れるのは簡単で糊着力がなぐボキンボキンと折れてしまふ。新しい軸は、地上へ冬の間も出て残った芽が、暖い年は二月下旬から小さい葉をもつて段々と伸び、三、四月になる。四月の半頃迄は、これで青葉が出るのかなと思わせるくらいは未だ小さきなのに、五月に近づくと三日か一週間かであれよあれよという間にばつと急激に大きくなり、紅い直径一厘前後の釣鐘状の花を対生に伸びた葉軸と葉軸の間から出す。地上を這う茎の一点から、左右二方に伸よく分かれて五厘から十厘ほどの長さの葉軸をのびし、その先きに、更にハート形の径六、十厘ばかりの緑の葉が、丁度子供が遊戯で万才をしたような恰好で開いている。徳川家の紋章は、その最初は葵でなくわさびの図紋だったとかいう話もきくが、あの誰でも知っている三つ葉葵の紋章は、この二葉葵、即ち賀茂葵を圖案化したものである。

一度も二葉葵を見たことのない方は、賀茂祭を見学する前に、賀茂下上社にづれかの社頭に静かに額づくといふ。日本の神社の中でも、最も美しい風格を備える上賀茂及び下鴨両社殿の現代の本殿（権殿）は、文久三年（一八六三）のもの、其他の社殿は後水尾寛永五年（一六二八）造替した当時のもので共に国宝であるが、この五月の薫風に揺れる拜殿の白地の幔（まき）の上に、くつきりと濃緑色に染めあげられた草の圖案紋、或はその建物の随所に打ち込まれた金具に彫り込まれている草の文様に目を留めていたよきたい。それこ

そ、今迄私が説明してきた賀茂の神紋二葉葵の文様化したものなのです。但し、下鴨の金具の中や葵祭に出す下鴨神社の過去の招待状の中に、この二葉葵ならぬ三つ葉葵の紋様の捺されているのを見出して、平安時代の関白や頼朝、信長、秀吉ら各將軍家の篤い帰依の歴史を思い、何か下鴨社に特別な徳川家との関係があったのかなどと、私と思じような勝手な推量を働らかせる方もおありかもしれぬ、ところが、詳細に見直せば、徳川家紋の三つ葉葵は、上が一葉で下に二葉となっているに反し、賀茂の三つ葉葵は、徳川と逆で、上に二つの葉が抱きあつて下に一つの葉が使われている。賀茂は上に二つ、徳川は上に一つで、いくら徳川將軍の権力を似せてしても賀茂の御神紋とそっくりなものが使われ得るというような事は、到底出来得ない畏れ多いことなのであつた。だから下鴨の正式の紋も二葉葵であり、時たま、これを図化した紋の一つとして三つ葉葵も用いることはあつても、それは決して徳川と一見似て、実は違つたものなのであることを申し添えておこう。

賀茂葵は、その採取地の清浄さに於て、わさびの栽培を思わせるものがある。終戦までは、上賀茂でも本殿の裏にもあつたし、下鴨でも糺の森に多く生えていたということであるが、このように市中の大气の汚染されてきた昨今では、すっかり消滅してしまつており、私が糺の森を歩いて流れて探しても見出し得なかつた。

先述の如く、上賀茂社で大体七千本、下鴨社でも大体同じ本数が毎年この御神事のため使われているという、京都御所を合わせると、大へんな数の葵草が大量に年々汚染の進んでいる京都の山辺のこう

いった偏した土地の、しかもそこかしこに少しづつ散ってしか生えていない場所から採られて葵祭のために使われているを思うにつけ、日本個々のこの賀茂葵のやがて絶滅に瀕することのないように願わずにはいられないのである。

さてこういった葵のハート形をした葉の形、及び対生で一つの軸に一点から同時に左右相対してかなり長い葉軸を出し、その末に葉が着いているという構成上の最小単位をいくつか重ねて一つの小枝を構成しているという点で、葵に最もよく似た樹木は何かというと、それは桂である。この知識は、私がやはり他日、下鴨神社を訪れた時得たものだ。「賀茂の祭儀には現在、葵と桂を使われている、平安時代も一見歌や文を讀む限りでは、葵は身につけた事はわかるが、桂の枝を果してつけたのか否か、文学作品ではつきりと明言しているものは、実に少ない。公卿の記録により葵と桂が用いられた事がわかるが、鴨に残る記録の中で、葵と桂が何頃から用いられ始めたとかいうような事を記す御記録はないのでしょうか。葵祭と称するのに、実際は葵と桂を必ずつけている事実に対して、何故桂という名称を落してしまっているのか。比重が同じなら、葵祭りではなく、葵桂祭りおよびよろしいのに。葵の方が主で古く、桂は後世の附加なのでしょうか。語呂が悪いから、桂の方を省略して了解ったのでしょうか。同等なら、葵の方を略して『桂祭り』としたって悪くなかったでしょうに。なぜそうはいわなかったのでしょうか。など思うのですが。』など質問し、日頃抱いていた疑問を解きたく思った時、その日私に應對してくださった荒木禰宜は、「そんな記録はない。桂が葵と非常に良く似ているから、補助的に用いられたの

かもしれない」との御意見であった。私は又もや荒木禰宜に御足労を願って、御好意によりその場所へ御案内いただき、糺の森の中で、曲りくねりもせず、すつくと高く高く伸びた桂の樹木の根元にある小枝とこの葵の構造を比較してみるものが始めて出来たのであった。

桂は植物事典などの説明によると高さは三十mくらいまで伸びるといふ大樹だが現在、糺の森の中にも数本ある桂の木だって、空に向って、いかにも古代人がこの樹に御降臨を希うに相応しく、高く直つ直ぐに中空に向って伸びている。二者を手にとつてよく見比べてみると、樹木と蔓草であるという違いをさておけば、葵の葉色の方が、より緑色が深く葉軸と茎がやゝ太くはあつても、その対生であることゝいい、葉がハート形であることといい、実によく似ている。そっくりだ。高い桂が親とすれば、葵は子供のよう。薔の比などではない。私は、このまるでそっくりな構造をもつた葵と桂を見比べ、荒木禰宜の言葉を反芻しながら、一方では、類似の事実を通して、下鴨神社の祭神建角身命とその娘玉依姫、上賀茂の祭神玉依姫の息子賀茂別雷神、即ち賀茂下上社と、玉依姫の夫であり別雷神の父たる昨大山神を祭神と仰ぐ日吉大社東本宮と松尾大社、この四社が四社とも、現在にあつてもその神紋は二葉葵、賀茂葵であるという事実を次のようにも考える。

松尾大社は松尾祭のことを一名「葵祭」とも称し、今なお祭には桂と葵をつけており、その点、賀茂と同じであり、三社とは離れた近江の比叡山の地にあつて山主神として祀られた大山咋神の方は、その祭、四月十二日より三日間行われる山王祭には、葵は紋章として存すけれども使わず桂だけが用いられ、お神輿を昇ぐ人達も皆桂

の小枝を一本鉢巻に挿している事、或は「聖徳太子伝」に、

「聖徳」太子、秦はたの造みやこ川勝あきかたにかたりて宜く、われきのふの夜夢見らく、北のかた五六里をさりてひとつの美邑みぢ(＝美しき村)にいたる、楓かへの林、はなはだかうばし、このはやしのふもとをゐて親族をひきいてわれを饗する事、はなはださかんなりと、中略川勝頓首して申さく、臣の臣あたかも御夢のごとし、その日に駕に命じて川勝先導す、その夜泉川せんせん(＝今の木津川)の北のほとりにやどしたまふ、中略太子大いによろこびて、その日楓野のおほい(＝大堰)にのぞみて、やどし給ふ、下略「出雲路本太子伝」とあって、太子が太秦の蜂岡にある秦川勝の第に行かれた文中で、松尾神社附近は、「楓の林はなはだこうばし」とか「このはやし(＝楓の林)のふもとにゐて」という文が見られ、桂の木の非常に多い地であった事が推される。又、「山城名勝志十」に引かれた「山城風土記」逸文にも、月読神が桂を神木として降臨したという話があり、また松尾神社の今は摂社となっているが、文徳帝斉衡三年(八五六)の創立で延喜式でも名神大に入っている月読神社の伝記に「旧記曰、歌荒櫛田云々南有桂里、旧説云往昔、月読尊、天降山背国葛野郡歌荒櫛田、桂林抄」(古風土記逸文考証所引)とある。この月読神に関しては、「日本書紀」にも伝承があるが、歌荒櫛田うたあらすだの桂林という表現といい、秦氏によって開拓された桂川流域の葛野辺には、桂の木の林が分布していたとも推され、秦氏或は大山咋命の側に、桂を神木として祭に用いるような要素があったのではないだろうか、という思いに馳られる。

此外、鴨長明の「歌林四季物語」にも「あふひをかくるは賀茂山静原より：かつらは松尾より奉れること御夢の告也」とか「日吉社神道秘密記」に「一桂木アリ神木之随一也、御杖差置給御垂跡之始也故祭礼申日、内陳桂進上、則社家中、一杖宛冠角差之。禁裏進献座主進上七社神輿以是莊嚴諸人頂載之。」と記るされている記事もみえる。或は葵桂を懸けると「夏天霹靂ノ災ナシ」とかの記事などもみえる。この中で葵と桂を懸けたら霹靂即ち雷の災を防ぐというのなど全く後世の附会で一顧の価値なしと却けられてしまう説であるが、逆に何故雷除けだと言われてきたかを逆推させる一助ともなるのではないか。即上賀茂の祭神別、雷神はまた「若雷神」とも称されているが、この「別雷」・「若雷」という表現より、親も雷神であると想定できなからうか。大山咋神の神性は、後世造酒神として西宮の酒造家らの帰依を得て、現在も酒造の神としてその名が全国に聞えているが、元来は雷神であったと考えられる。

さて、以上は、葵と桂をみながら「何故葵草と桂の枝が用いられただのらうか」という自然な疑問に対する私なりの推測だったのであるが、一方文献上ではどのような解答が得られるのか、次に調らべることにしよう。

現在迄に管見したところによると、次の六書に賀茂神社の祭神及び縁起話がか載っている。

(一)「釈日本紀 九 述義」中に引用の「山城国風土記」

「風土記逸文」中に収録の「山城国風土記逸文」

(二)「本朝月令」中に引用された「秦氏本系帳」の一文

(三)「袖中抄」第十七、せみのをがはの項に「或書」と記された一文
 (〔賀茂縁記〕)

(四十巻本「伊呂波字類抄」中に引用された「本朝文集」に収録の
 一文)

(四)「年中行事秘抄」中に引用の「旧記」と称された書の一文。

(〔賀茂旧記〕)

(六)「公事根源」四月の記事

そして、此等の六つの賀茂縁起といま依りよんでみることにする話を詳細にみてみると、就中、(四)(六)という年代が比較的下った三つの書のみが、葵と桂を何故祭祀に用いるかという由来伝説を載せているのである。しかも、(六)の「公事根源」には、唯「昔、夢の告げ待りしよりけふ人々葵かつらの蔓をかくるなり」と全く簡単に記すのみで具体的にどんな夢の告げがあったのかは記載せぬ故、全くわからない。となると「年中行事秘抄」と「本集文集」収録の二逸文のみがその話を知らせる書であるというわけである。そこで、どんな話なのかを、「伊呂波字類抄」に例をとって見てみよう。

(訓点は山本附す)

「本朝文集」云「御祖多々須玉依媛命、始^ニ遊^ニ川上^ニ時、有^リ美箭流^レ来^リ依^ル身^ニ。即^チ取^リテ之ヲ挿^ス床^下ニ。夜化^ニテ美男^ト相副^ル。

既^ニ知^ル任^シ身^ヲ。遂^ニ生^ル男子^ヲ。不^レ知^ラ其^ノ父^ヲ。云々。吾天神^ノ御子^{ナリ}乃^チ上天^ニ也。干^ノ時、御祖神等恋慕哀思^ス。夜^ニ夢^ニ天神^ノ御子^ヲ云々。云々。造^リ葵^ノ楓^ノ纏^ニ嚴^ニ饒^ニ待^レ之^ヲ。云々。山本^ニ坐^ス天神^ノ御子^ヲ稱^ス別雷^ノ神^ト。」

この文でみると、御祖、即ち上賀茂の祭神別雷神わけいかづちのかみの母である玉依姫たまよりひめが、川上一風土記によると石川の瀬見の小

川となっており、今下鴨神社境内を流れる蟬の小川ではなく、ここは賀茂川の事で瀬見とは瀬の見える浅き川の意で遊んでいると、美しい矢一風土記には瀬の見るやとあるが流れて来た。拾つて床の下に置いておくと、夜美男に化して身に副った。そして懐妊して男の子を生んだ。ところがその子の父親が誰であるかわからない。このあと右の「本朝文集」では「云々」となって、話が途中で省略されてわからなくなっているが、そこを「本朝月令」に載る

「秦氏本系帳」(本文掲載は、紙数の都合及び葵桂に関する夢告譚をもたないので、ここにはのせず、次号にゆずる。)をもって補うと、この子がやがて成人した時に外祖父の建角身命たけつぬみのことが宴遊を開き、七日七夜楽しく遊んだが、その酒宴の席で、「お前が父親だと思う人に酒を飲ましめよ」と言うと、その場に居合わせた衆人には目もくれず、酒杯をかざして天に向つて祭ろうとされ屋根の葺を分け破り昇天してしまわれたという。さて、右の字類抄中の本朝文集よりの引用文によると、「私は天神の御子である」といつて天に昇ってしまった我子を慕つて歎けき悲しんでいた祖神おやがみの夢枕に現われた別雷神は、「葵と楓の纏を造り、嚴かにお飾りをして、私の降臨するのを待て」とお告げになったというのである。この「本朝文集」の文をもう一つの同じ葵桂譚を有している「旧記」と比較すると、

「舊記」云「御祖多々須玉依媛命始^ニ遊^ニ川上^ニ時、有^リ美箭流^レ来^リ依^ル身^ニ。即^チ取^リテ之ヲ挿^ス床^下ニ。夜化^ニテ美男^ト到^ル。

既^ニ知^ル化身^ヲ。遂^ニ生^ル男子^ヲ。不^レ知^ラ其^ノ父^ヲ。乃^チ造^リ字氣比酒^ヲ。令^下子^ニ持^テ酒盃^ヲ。供^ヘ父^ヲ。此^ノ子^持酒盃^ヲ。振^リ上^テ於^テ天雲^ニ而^シ云^フ。

A²
 『吾天神御子ナリ。乃チ上^ル天ニ也。于時、御祖ノ神等悉慕哀思^ル。夜夢
 天津ノ御子ヨ云フ』各、將^ス逢^ハト吾^ニ。造^リ天ノ羽衣、天ノ羽裳、
 炬^シ火^ヲ祭^リ鈴^ヲ待^テ之^ヲ。又、飭^リ走馬^ヲ、取^リ奥^ノ賢木^ヲ立^テ阿^ノ礼^ヲ、悉^ク
 種々^ク絲色^ヲ。又、造^リ葵^ノ楓^ヲ漫^ラ嚴^マ飾^リ待^テ之^ヲ。吾將^シ采^ル也。
 御祖神、即チ隨^テ夢^ニ教^ニ令^シシムルハ彼神祭^ニ用^フ走馬^ヲ并^ヒ葵^ヲ漫^ラ楓^ヲ漫^ラ
 此之縁^{ナリ}。因^リ之^ニ山本^ニ坐^ス天神ノ御子ヲ稱^シ別雷ノ神^ト。又云。
 嵯峨天皇弘仁十年甲午、勅。山城國愛宕郡賀茂御祖并別雷二神之
 祭、准^シ中^ノ祀^ト者^ト。
 (訓点は山本附す)

「本朝文集」より十卷本「字類抄」中に引かれた文は、「旧記云」として始まる「旧記」の「A1・2」・「B」・「C」部分のみを抜萃した分であり、逆に云うと、「伊呂波字類抄」に引用された「本朝文集云」の「云々」となっている部分に右の傍点部分を加えると、「旧記」が出来上るわけである。「本朝文集」に収録されていた文も、結局は「年中行事秘抄」に引用されている「旧記云」の抜萃文か或は「旧記」と同一系統文からの抜萃文であろう。又、現在の岩波古典大系本にのる「山城国風土記逸文」は、「积日本紀」に収録されている文をそのまま掲載したものであり、「秦氏本系帳」は「积日本紀」に載っていた「山城国風土記」の逸文中の当該箇所を抜萃文としてさしつかえなからう。つまり言えることは、元慶五年(八八一)の撰と考えられている「秦氏本系帳」、これはもつと以前、即ち古事記撰進の和銅五年(七一二)の翌年に編纂の命が下ってより撰進された風土記の文をそのまま取り入れた上、更に風土

記にもない幾つかの文も、他書より採集収録して作成されたものと思われる。「袖中抄」の一文は、秦氏本系帳の一部を抜萃したものであろう。とあれ、葵桂譚が、永仁から嘉暦年(二一九三—二二一九)にわたって写功を畢つた由の奥書をもち、その内容からみて平安末から鎌倉初期の頃出来たと考えられる「年中行事秘抄」に初めて「旧記云」として載っているというわけである。何故、葵と桂が用いられてきたかの理由は、今のところこれ以外は見当たらない。さて、葵と桂の両つが共に使用されている事を示す記録を遡行するに、「親信卿記」天延元年(九七三)四月十四日の条(後掲)および「小右記」天元五年(九八二)四月廿四日の条に、「遣^シ内蔵寮^ニ、令^シ受^テ葵^ノ桂^ノ等^ト」との文が初見してより、治安三年(一〇二三)四月十六日の条にも「今日无^シ別挿頭^ト、於^テ内蔵寮^ニ請^フ桂^ノ葵^ノ、使^シ少將^ト陪^テ從^テ等^ト同挿頭^ト多^ク」とあり、桂と葵を挿頭に使用していることは瞭然としている。又、「西宮記 四月加茂祭事」の条には、「中申 糸所進^シ楓^ノ縵^ヲ」とか「内蔵寮進^シ桂^ノ葵^ノ」と見える。桂の縵^ニ縵^カを糸所が作っており、九百年代の半頃にははつきり葵や桂の縵^ハはあったことが窺える。さて、この桂と葵は、どのような所にどんな風に使用されたのであろうか、右の小右記の文より、すでに挿頭に用いられている事はわかるが、葵桂は、まず「親長卿記」に「葵^ノ桂^ノ、自^ラ社^司等許^シ送^リ之^ヲ、如^シ例^ト年^ニ」(文明十七年四月十七日)とか「薩戒記」に「賀茂社送^リ葵^ノ桂^ノ、葵^ノ挿^ル木^ノ原^ノ、副^シ桂^ノ社^司著^シ布衣^ヲ持^テ来^リ之^ヲ」又^リ折^リ概^ニ下^ル」(応永卅三年四月廿日)とかいう文が見え、又、「諸国年中行事大成 四上」に「同日葵^ノ蔓^ヲ並^ニ桂^ノ枝^ヲを、禁裏^ニ・仙洞^及び関白^ノ家に献^スず、則^チ御簾^ニ掛^ルる、一^ニ中略^一諸家^及び賀茂^ノ地人^ハ、悉^ク門^ノ戸^ニ掛^ク、祭^日に

は、賀茂、地人、各是を頭髮に挿み、官家の人は、各葵、蔓を衣領に懸らる下略とあり、上は朝廷閨白公卿を始めとし下は、賀茂社の人々は云うに及ばず近在の者も、門戸に葵を飾ったという。宮中や公卿家では御簾にかけたと出ているが、「薩戒記」にも「又飾葵桂於簾等」(応永廿五年四月十七日)とあるし、「玉葉」には、一条通に面して敷設した棧敷の「御簾、毎間付葵桂」(嘉禎三年四月十六日)とあって、はっきりと、葵のみならず、桂の枝も御殿や見物棧敷の御簾に飾っていたことがわかるのである。又、宮中では御簾ばかりではなく、「祭也十五日、葵桂各二折櫃上御社二櫃、下御社二櫃云々、結付昼御帳、犀角辺、結付南殿御帳」と清涼殿、昼御座の御帳台の犀角を吊られていた左右の柱とか、紫宸殿の御帳台の御帳の左右の柱などにも結び付けたことが「親信卿記」の天延元年(九七三)四月十四日の条によって判かる。

「枕草子」に「祭のかへさ、いとをかし。……雲林院・知足院などのもとに立てる車ども、葵かつらどもも、うちなびきて見ゆ」の、「葵かつら」と言う文字が、葵だけなのか、或は葵と桂の両つを言うのか、人によって意見がまちまちであるが、私は、何も葵蔓と葵だけに限定して解さねばならぬ必然はないと考える。現在、杏葉の牛車にも、一見庇より仰々しく飾られて吊り下がる藤花の造花の下にすっぽり覆われているため、見物の人目には付かぬけれども、その背後や左右にある簾の上部に十数本桂の枝に葵をつけて飾っていること、下鴨社の宝物「文永賀茂祭絵巻」中の牛車の前簾の上部の左隅右隅の両隅から上向きにそり上り乍ら斜めにたれてい

る植物の図は鎖のように差し連らねてたれ下っているのではなく、真中で切れながら皆斜めにしなっているから、はっきりしないけれど、今述のべた如く日射に弱い葵の性質を考える時、やはり桂を挿していたように考えられ、葵と桂、桂の枝に葵草をさげている状景だろうと思う。先記の記録類も、宮中でも葵と桂の両つを御帳や挿頭に用い、見物の棧敷の御簾の間毎にすらもとりつけたというのに見物の車すべて、葵蔓だけであつたと考えられにくいと言う点からしても、附記しておきたい。御簾に葵草と桂をかけるというが、一体どんな風にかけるのか。そんな状景を描いた絵巻物や図は絶無に近い。現に、「年中行事絵巻」や源氏物語絵などにみえる賀茂祭の図でも、御簾はおろか、牛車や冠さえにも葵の草の付けられたりしている場面がないのである。が、私の管見したところでは、御簾の懸け葵―桂は添えていないの図は、今迄にたった一つ、京都御所の御学問所の正面床の間向って左脇にある上部違い棚の四枚ある小袂の右端の一枚の上に、安政二年御造営当時の土佐光文画による図があること及び冠では、現在でも勅使及賀茂両社の神官は葵と桂を冠の巾子の前に挿しかざすが、絵画の上では同じく、京都御所の お三間おみま中段ちゆうかん間の十六枚の襖及び遣戸計十六枚に描かれた見事な「賀茂祭図」があるが、このやはり造営当時の駒井孝礼によって描かれた図の中で、勅使、内蔵使等は冠の巾子の部分に、供廻りの稚色は皆、折鳥帽子の後頭部に、頭髮に突込んで、挿し込んでいる葵だけの挿頭、これを桂と葵の両方を使った諸蔓しよまんと呼ぶに對して、片蔓かたまんと呼んだが、その葵の葉だけを使った片蔓の

図がある事を紹介したい。そうして、この私にとり貴重な大発見も「そのような図がございませんか」と尋ねた折に、平井三良氏が御指摘下ったのであることを、感謝の念と共に附け加えておきたいと思う。

御簾に桂と葵をつける飾り方は、古式を忠実に踏襲して現在も行われている。即ち下鴨社は神前の御簾に葵を吊った桂の枝を挿す。葵の懸け方は、最初は対生の一茎を桂の枝にひっかけ、次にはその葉軸の一つ一つに計二茎引つ懸け、三番目には、四枚ある葉の各々に一茎、つ計四茎、即ち、上から、一↓二↓四と、計七茎を桂二枝にかけ加えこう懸けた桂枝を左右二本、ぶすつと御簾に×字状に挿し違えてかざるといふ、飾りつけ方が行われている。又、御神饌には、葵百二十茎を六把に、桂二十本を一把に束ね、桂の一把を葵六把の真ん中に置いて一緒に御敷に載せて、供えておられ、その絵図が「明治三年賀茂祭神饌備進員數並供進指図並品員仕立様之図」と称する下鴨神社の文献の中にも掲載されている。「泰山集」にも元禄七年に「神前掛葵與桂」とあり、右の明治三年の書といえど元禄の、いやそれ以前の相伝されてきた古式の形を留めたものであろうことも想像にたかくない。

「過にしかた恋しきもの、枯れたる葵」・「あふひいとをかし祭のをり神代よりしてさるかざしとなりけん、いみじうめでたし」

今迄、葵について考えた目で、もう一度読み返せば、この枕草子の文も、なかなか味わいがあるはありませんか。

註 1

「神社名鑑」には上賀茂は二葉葵、下鴨は三葉葵となっているが、両社とも賀茂葵の図案化したものであることに変わりはない。下鴨も正式には二葉葵が使われている。但、下鴨三井社の檢皮葺き唐門の頂にある瓦一枚は寛永頃の徳川の庇護を語るか徳川の三葉葵である。

註 2

日本書紀分注に「歌荒榎田は山背国の葛野郡にあり」とあり、即葛野郡の宇多地方の田地。「続日本紀」大宝元年四月の勅にも「山背国葛野郡月詠神」との文が見える。

註 3

「日本書紀」の顯宗天皇三年二月の項。

註 4

「賀茂年中行事大成」三四月

註 5

伴信友は「瀬見小河」に於て、「袖中抄」に掲載されている「或書云」の「或書」とは、鴨長明が頭昭に話した事のある「賀茂縁起」を後に長明から借りて「袖中抄」にのせたと論じている。

註 6

同じく信友は「瀬見小河」で「年中行事秘抄」に「旧記云」としてのせる「旧記」なる書を「賀茂旧記」とよんでいる。三巻本たる前田家・黒川家本には本朝文集三云の記事なし。

註 7

例えば本年四月京都国立博物館に出品された「葵」の巻の車争いの図にも、葵や桂は描かれていない。出品目録番号 14・31。

註 8

「葵蔓桂枝是を諸蔓と称す」(註 4 に同じ「年中行事大成」)

「葵桂、両備曰「諸蔓」、葵一種曰「片蔓」」(「泰山集」雑著甲乙録)